

増補 『三猿物語』 とは何か

服部 仁

はじめに

先般、実録『三猿物語』の紹介（『三猿物語』とは何か）（『江戸文学』29、二〇〇三年一月、ぺりかん社）をした。しかし、私の調べが足りなかったことと、掲載誌の紙幅が足りなかったせいで、不十分なものとなってしまった。そこで今回、本稿の第二章等を増補し、補訂版を掲載する。

『三猿物語』という写本を紹介する。

実は、本書の紹介については若干の躊躇をする。それは、本書に登場して大儲けをする人物の後裔の方が、大いに繁昌して現存しておられるからである。本書の存在を知ったのは十六、七年くらい以前のことであるが、右の事

由により、今まで本書にあえて触れなかった。このたびは、差し障りのない範囲で触れようと思う。

また本書を実録と呼ぶのには、これまた若干の躊躇をする。そのわけは、後述するように、いわゆる実録とは表現形式がいささか異なるからである。しかし、それではこの『三猿物語』を、いかなるジャンルに入れるかということになると、やはり実録に入れざるを得ない。

一

本書の伝本は、あまり多くない。浄土真宗大谷派の僧侶でもあり、私の勤務先、同朋大学文学部仏教文化学科教授の織田顕信氏によれば、「尾張物だから、名古屋近辺にたくさん残っているはずだ。」ということであるが、管見では、現在のところ三本しか存しない。

とはいえ本書は、江戸時代名古屋にあったところの日本最大といわれた貸本屋大野屋惣八、通称大惣の蔵書目録、『大野屋惣兵衛蔵書目録』第十冊（原本外題「惣八」とあるべきところを「惣兵衛」と誤記、原本早稲田大学図書館蔵、柴田光彦氏編著『大惣蔵書目録と研究 本文篇』昭和五八年三月刊、五四一頁）「尾張物 判紙形 写本ゆ 六百題」（同 日記）と並記）の部に、

三猿物語 本願寺騒動 五 京大

同 式篇 六 同

と登載されている（京都大学図書館の請求番号は省略した）。

これにより、本書の概略が分かる。則ち本書は、尾張物であり、本願寺、つまりは東本願寺（浄土真宗大谷派）の騒動、要するにゴシップ（醜聞）を筆録したものである。

こうしたものの通例として、著者の署名はない。織田顯信氏は本書の作者を、大惣に関係があり、名古屋別院の本堂再建（文化二年の手斧始から文政六年遷仏供養まで）の様子を『絵本富加美草』五冊や『名陽東御坊繁昌図会』四編二冊など（『名古屋別院史』史料編・別冊「平成二年三月刊」を参看されたい）に描いた高力猿猴庵ではないかと想定しておられる。当たらずといえども遠からず、大惣の筆録者・作者グループの一人、あるいは大惣ではないかもしれないが名古屋の戯作者グループの一人が著者ではないかと思われる（山本卓氏「玉晴堂芝誘とその戯作グループ」『近世文芸』42、昭和六〇年五月刊）、長友千代治氏「貸本屋大惣の文壇」『近世の読書』昭和六二年九月刊、所収）参照）。ただし、山本祐子氏の「高力猿猴庵著作年譜 新出本の紹介を含めて」（『名古屋市博物館研究紀要』第二十四卷、二〇〇一年三月刊）を見てみるに、猿猴庵は大惣と深い関係にあることは確かだが、その著作のほとんどは絵本とか絵図を多く持つものである。本書『三猿物語』には口絵・挿絵は一切ないので、猿猴庵が作者である可能性は低いと思う。

本書の作者が、大惣の筆録者・作者グループの一人、あるいは大惣ではないかもしれないが名古屋の戯作者グループの一人ではないかというのは、以下の理由による。第一点は、右に引用したように、本書の諸本のうち京都大学

図書館所蔵本はいわゆる大惣本であること。その大惣本には付されていないことが残念なのだが、他の二本の初篇卷之五末尾には、菓の広告に見立てた「金錢／ふゑる 伝授円」の効能書き（勿論、本書の登場人物たちが、本家薬法調合所とか売弘所に、効果的に配列されている）とか、浄土真宗大谷派の「正像末和讃」見立ての「騷動増御和讃」、善導大師『玄義分』の廻向文の見立て、御文五帖目第十通の見立て（以上三点、同朋大学学長沼波政保氏の御教示）、俗謡見立ての「京六条ぬすみ道成寺」等々が付されている。そして架蔵本にはないのだが、伊藤圭太氏蔵本では初篇最卷末半丁（裏表紙見返し）に、「三猿物語後編 続而出来 五卷」「牡丹堂論」の広告が記してある。この左に「尾陽書肆」とだけあって、その下部が空欄であるのが惜しまれる（図版参照）。ともあれこの広告は、長友千代治氏が「貸本屋大惣の文壇」（前掲）に掲載しておられる「新／織 舞意鈔」の広告などを思わせるものである。これが第二点である。こうしたことにより、本書の作者は、恐らく大惣の筆録者・作者グループの一人であろうと推測する。これに加えて、浄土真宗大谷派、つまり東本願寺の内情に精通していた者、門徒あるいは僧侶であったことは、本書の内容からして当然のことであろう。

なお、伊藤圭太氏蔵本では、先の「金錢／ふゑる 伝授円」の広告の「尾州町在取次所」の後に、何人の仕業であろうか、「玉屋町 永楽屋東四郎」「伝馬町 菱屋久八郎（カ）」といった名古屋の書肆名がもっともらしく書き足されている。

大ニ身上ナホスヘニ
新規ニ材木ウレユニ

材摠真宗ニイリヌレト
不術ニマクナヒオホクニテ
無性ニ高利ヲ上ルナリ
末法ノトキノニ入モ

自身惣念ヲサニオキテ
柳木山ヲモイッハリテ
柳坊ノ門ニソリタマフ

弥屋ノ同行キ、エツ、

倍偽マコトヲタハサント
城下講中モトモニ

廣潤ニオサアキ、ニナリ
五欲悪心嘉乎次ニ

蓮湖同心スルユヘニ
不可称不可説不可思議ノ
罪業行有、身ニミテリ

(三十八オ)

(三十七ウ)

願以此金徳
平日未一切
同遣普請等
一生母桑暮

盗入一流ノ遺恨ノヲモムキハ新倉ツ
モツテ初下セラレ猿ソノホカモロノ
道具ヲコミラエ一銭ツモ盗下リ貸ツテ
不可思議ノ元利ニミテ一生ハ母桑ト
セシタマフソクタイハ一念發起ノ
入坊ナレトモマタンタリ柳木山エモトリ
イリ子ロンダヌスムトコ、ロウキナリ
アナカニコ

(三十九オ)

(三十八ウ)

赤土奈崎の道成寺

一〇七
 初五夜
 初五夜に月を再遊せし中三條の
 今昔ついでに花を吹雪を口舞りと申
 世は一様のはなやち肉かうゆと酒年
 けて世あつて人々皆これにまぬ入のこ
 ちをいひて先づ初五の月を遊ぶあつて
 いふはうとて花あかみすけいふはうと
 といふはうとて

(三十九ウ)

初五夜に月を再遊せし中三條の
 今昔ついでに花を吹雪を口舞りと申
 世は一様のはなやち肉かうゆと酒年
 けて世あつて人々皆これにまぬ入のこ
 ちをいひて先づ初五の月を遊ぶあつて
 いふはうとて花あかみすけいふはうと
 といふはうとて

(四十オ)

權のついでに月を再遊せし中三條の
 今昔ついでに花を吹雪を口舞りと申
 世は一様のはなやち肉かうゆと酒年
 けて世あつて人々皆これにまぬ入のこ
 ちをいひて先づ初五の月を遊ぶあつて
 いふはうとて花あかみすけいふはうと
 といふはうとて

(四十ウ)

死

初五夜に月を再遊せし中三條の
 今昔ついでに花を吹雪を口舞りと申
 世は一様のはなやち肉かうゆと酒年
 けて世あつて人々皆これにまぬ入のこ
 ちをいひて先づ初五の月を遊ぶあつて
 いふはうとて花あかみすけいふはうと
 といふはうとて

(四十一オ)

戸名を本庄夜西人表の合佛
妙者と又世々内心の七夜の星と
漢文之前

- 一 連年の因妙心の空のぬや〜七星位
- 一 町在の雲再地なきや〜七星位
- 一 材鬼をのりき〜七星位
- 一 一歩の傍なきあけぬや〜七星位
- 一 一歩の傍なきあけぬや〜七星位
- 一 一歩の傍なきあけぬや〜七星位
- 一 一歩の傍なきあけぬや〜七星位
- 一 一歩の傍なきあけぬや〜七星位

一 歩位
一 歩位
一 歩位
一 歩位
一 歩位
一 歩位
一 歩位
一 歩位

一 歩位

三階物語後編 終

(四十二オ)

(四十一ウ)

三階物語後編 續而出末 五巻

街談 杜丹堂論
全三巻 近世發行
一 巻 尾陽書肆

尾陽書肆

三階物語後編 續而出末 五巻
一 巻 尾陽書肆

(裏表紙見返)

(四十二ウ)

ここで先に触れたところの、本書巻末に付された「正像末和讃」の見立ての「騒動増御和讃」等々の見立てについて、真つ当なものと比較対照して見ておく。これが、なかなかよくできてきているのである。本書『三猿物語』に記されているものを先に引き、後に元となった聖教を三字下げ、重なる部分に傍線を付して示す。

騒動増御和讃
ソウドウマス

御坊エ内々七千両

調達サセテトシヲコシ

マコトノ信心ウルヒトハ

コノタヒキ、テオソルヘシ

年々正月元日ヨリ

家職ヲ捨テツメルヒト

スナハチ盗ニオナシクテ

大分身上ナホスヘシ

増補『三猿物語』とは何か

新規ニ材木ウルユエニ

材摠真宗ニイリヌレト

不断ニマイナヒオホクシテ

無性ニ高利ヲトラルナリ

末法ノトキノ二人モ

自身惡念ヲサシオキテ

御本山ヲモイツハリテ

御坊ノ門ニソイリタマフ

弥屋^{ミヤ}ノ同行キ、エツ、

信偽マコトヲタゞサント

城下講中モロトモニ

広間ニオキテキ、ニケリ

五欲惡心嘉平次ニ

蓮開同心スルユヘニ

不可称不可説不可思議ノ

罪業行者ノ身ニミテリ

正像末和讃（『諸本校合 御草稿三帖和讃』寛政三年三月序）（傍訓は省いた）

五十六億七千万

弥勒菩薩ハトシヲヘン

マコトノ信心ウルヒトハ

コノタヒサトリヲヒラクヘシ

念仏往生ノ願ニヨリ

等正覚ニイタルヒト

スナハチ弥勒ニオナシクテ

大般涅槃ヲサトルヘシ

眞実信心ウルユヘニ

スナハチ定聚ニイリヌレハ

補処ノ弥勒ニオナシクテ

无上覚ヲサトルナリ

像法ノトキノ智人モ

自力ノ諸教ヲサシオキテ

時機相応ノ法ナレハ

増補 『三猿物語』とは何か

念仏門ニソイリタマフ

弥陀ノ尊号トナヘツ、

信樂マコトニウルヒトハ

憶念ノ心ツネニシテ

仏恩報スルオモヒアリ

五濁惡世ノ有情ノ

選択本願信スレハ

不可称不可説不可思議ノ

功德ハ行者ノ身ニミテリ

(廻向文)

願ネガハクハコノキントクモツテ以此金徳

平日求一切

同遣普請等オナジクフシントウニツカヒ

一生安樂暮イツシヤウアンラクニクラス

廻向文

願以此功德 願はくは此の功德を以て、

平等施一切 平等に一切に施し、

同発菩提心 同じく菩提心を發して、

往生安樂国 安樂国に往生せん。

(御文)(句読点を施した)

盗人一流ノ遺恨ノヨモムキハ、新倉ヲモツテ初リトセラレ候。ソノホカモロノ道具ヲコシラエ、一錢ツ、モ盗トリ貸ツケ、不可思議ノ元利ニシテ、一生ハ安樂トセシメタマフ。ソノクライハ一念發起ノ入坊ナレトモ、マタソノウエ御本山エモトリイリ、ネコソゲヌスムト、コ、ロウヘキナリ。アナカシコノ。

御文〔五帖目第十通・聖人一流〕(同朋大学仏文化研究所研究叢書V『実如判 五帖御文の研究

資料編』二〇〇三年三月刊)(句読点を施した)

聖人一流ノ御勸化ノヨモムキハ、信心ヲモテ本トセラレ候。ソノユエハモロノ雜行ヲナケステ、

一心ニ弥陀ニ帰命スレハ、不可思議ノ願力トシテ、仏ノカタヨリ往生ハ治定セシメタマフ。ソノクラキ

ヲ一念發起・入正定之聚トモ釈シ、ソノウヘノ称名念仏ハ、如来ワカ往生ヲサタメタマヒシ御恩報尽ノ

念仏ト、コ、ロウヘキナリ。アナカシコく。

本書『三猿物語』初編卷之五の末尾には、「伝授円」という葉に見立てた広告や、「京六条ぬすみ道成寺」「厄はらひ」といったものが付されている。しかし、何と云っても右の三編が傑作であるし、しかも作者の素性を明らかにしているものである。先述の沼波政保氏にお教えいただいたのだが、実はこの三編の聖教は、報恩講（先師の恩に報いるためにその忌日に行われる法要。浄土真宗大谷派では、親鸞の忌日十一月二十八日頃に行う。）の時に必ず唱えるものなのである。ということは、本書『三猿物語』の作者は、こうしたものに耳慣れた人、つまり浄土真宗大谷派（東本願寺）の僧侶、あるいは門徒であったと帰結する。こう確定して間違いなからう。

三

本書の伝本とその書誌について述べる。既述したように、本書の伝本は以下の三部で、すべて袋綴四針眼訂法の写本である。

A 京都大学図書館所蔵本

・外題「新／撰 三猿物語 前篇 壹（〜五）」

後篇 一（〜五下）

・内題「三猿物語（ナシ）、後篇」

・前篇五卷五冊、後篇五卷六冊

・大本

・柿洪で斜格子刷毛目の表紙

・旧大惣本、三篇欠。

・前篇卷之五末に、附言・広告を欠く。

B 伊藤圭太氏所蔵本

・外題「新撰三猿物語 初篇 仁（シ信）

二、三篇 上（シ下）」

・内題「三猿物語（ナシ）、後、三篇」

・初篇五卷五冊、二篇三卷三冊、三篇三卷三冊

・半紙本（大きさは微妙に異なる）

・装丁は三篇共、縹色布目地表紙

・元々は大惣本の複本か、ないしは大惣本の写し。

・初篇仁卷裏表紙見返しの左下端裏に「四篇迄シメテ十四冊」とある。よって現存不明だが、元々は四篇三冊も存したらしい。

- ・ 二篇上巻見返し裏に、「文政第六未之年」等との三篇末の書きかけがある。よって文政六年以降の書写か。
- ・ 初篇巻之五末に、附言・広告を付す。

C 架蔵本

- ・ 外題「新撰三猿物語 式篇 仁（信）

三篇 仁（智）」

（初篇は表紙欠）

- ・ 内題「三猿物語（ナシ）、後、三篇」

- ・ 初編巻之四・五の二冊、後編五卷六冊（巻之五上下）、三編四卷四冊

- ・ 初編大本、後編・三編半紙本

- ・ 後編三編 朽葉色無地表紙

- ・ 後編巻之五下裏表紙見返しに、

「三猿物語 五冊 東書房

同二之部 六冊

同三之部 五冊 吉兵衛

同四之部 嗣出 印〔東書房〕

という紙片が貼付されている。

・初編卷之五卷末に、B本にある「牡丹堂論」等の広告だけはない。

・B本の二・三篇が、C本の後編に相当する。

四

書名「三猿物語」から、いわゆる見ざる、言わざる、聞かざるの意かと思うと、卷之一冒頭に、

頃は文政四巳之年、江州におゐて又左衛門・吉右衛門・市左衛門、此三人は、智恵万人に勝れ、一を聞て十を知るごとく、弁ぜつさわやかにして、何一ツ不足なし。然、御本山へ入こみ、御本願の御いわれあくまで聴聞

いたし、大ていの法中も叶はぬ位に聞覚へ、能弁を以御さんげ之趣、きくもの一人として涙ながさぬ者はなし。とあり、少し後に「此三人の同行を三疋猿と名付けり」とあることにより、基本的にはこの三人の総称からの命名ということが判る。ただし、先の「見ざる、言わざる、聞かざる」の意を効かせていること、勿論である。この三人は『真宗人名辞典』（柏原祐泉氏・藺田香融氏・平松令三氏監修、一九九九年七月刊）には出てこない（以下、真宗の僧侶については、同書に拠る。しかし、この辞典は年紀を陰暦の元号ではなく、太陽暦の西暦だけで記している。見識を疑う。）。

この三人が、「御家老下間治部卿殿へ内々取入」、二十五万両に及ぶ浄土真宗大谷派の借財を皆済してみせたところから、物語は始まる。この下間氏は、後で出てくる粟津氏と共に、真宗大谷派の家臣の家で、代々治部卿を通称

とすることが多い。

次に登場するのが、

越後において、徳龍子と申僧あり。格別学文も無之候へども、衆生に縁ふかき人ゆへ、随心の同行より嗣講師に御取揚被成下候様願出候処、

とある徳龍である。「其せつ同国に知源子と申て、徳龍子より一段上之学者有」とある知源と、学階（僧侶の学識によって与えられる位階）の第二位嗣講師になるのを競う。結果的に、徳龍の方が、本山に四千両を調達した功により嗣講師となる。事実としては文政六年のこと。知源という僧侶はみあたらなかったが、智現という越後出身の僧侶が同時期におり、こちらが嗣講師となるのは八年後の天保二年のこと。果たして、この智現のことであろうか。

さて徳龍、弘化四年には学階の第一位講師にまで進む徳学の僧であるが、これほどの人となると毀誉褒貶が激しい。第三節では、

徳龍子は酒宴之上にて、天井へひらくも（平蜘蛛）のこたくひつ付候事、或は壁を這ふ事、ひぎの下三寸程すく事、其外希代之ふしぎ度々なり。

という秘法を使うということで、切支丹ではないか、という疑いまで受けるが、無事に納まる。納まりはするものの、相当に怪しげな、いかがわしい人物として描かれていることが理解できよう。

そしてこの章の末尾は、先に記した実録らしくない書き方をしている。すなわち、「委敷事は略す。」と結んでいる。別段この章だけではなく、「委しくは略す。」で終わる章は枚挙に暇がない。何か元とする物があるかのごとき

こうした書き方は、実録ではあまり見かけない。

文政五年十一月十五日（事実としては文政六年のこと）に、京都御本山出火炎上。その再建に関わって、奇っ怪な話が飛び出す。

なお真宗大谷派本山東本願寺再建にかかわるものと言えば、天明八年の京都大火で類焼した時の用材確保のために、信濃・駿河・甲斐・遠江を見分した花誘居士作の読本『遠山奇談』（初編）四巻四冊寛政十年四月刊、後編四巻四冊享和元年三月刊）が思い浮かぶ。だが、こちらは紀行が主眼であり、その中に奇談、奇瑞が織り交ぜられている。自然界の不可思議な事象は描かれているのだが、人間的ないかがわしさには無縁のものである。

文政度の本山再建の際に登場するのが、名古屋の材木屋惣兵衛である。

材木屋惣兵衛と申者あり。さしてよき身上にても無之、漸五六百兩之しんだいと申風聞に御座候。此者、材木屋御坊へ用達仕候而より、追々身上増長いたし、「ひとへに御坊の御かけ」と風聞仕候。

とあり、文政の本山の火事の報を聞くや、三人の同行に、

「付而は惣兵衛殿には、承れば禪宗のよし。御用を願には他宗にてはむつかしく候故、兎角、門徒に改宗可有」と言われ、材木屋惣兵衛は、曹洞宗の旦那寺から、一代限りの約束で真宗大谷派に改宗し、本山再建の材木を用立てたのである。『材惣三百年史』（材惣木材株式会社材惣三百年史編纂委員会編、平成三年六月刊）には、

寛政九年（一七九七）五代惣兵衛を襲名した惣九郎（隠居名惣助）は、（中略）生来胆略にして機敏な人物と伝えられている。

九代（論者注、尾張）藩主宗睦の時、東本願寺名古屋別院の再建の情報をいち早く知り、真宗への改宗をおのれ一代限りとして菩提寺（曹洞宗）の許しを受けると、京都の大谷派本山へ参上して法主達如に謁見、多額の寄進を施して帰依の誠を尽したという。

とある。改宗したのは、別院再建（材木を御坊へ用達）の時であつたらしい。材木屋惣兵衛のことを、『材惣三百年史』では「生来胆略にして機敏な人物」とはするものの、改宗の一件は、どう考えてもかなり強引なやり口というべきであろう。一代限りの改宗などということが、そんなに容易くできることとは思えない。

こんな調子で、宗門の醜聞（スキャンダル）と建築疑惑（いわばゼネコン汚職）を織り交せて、話は延々と進んでいく。